

三つの宝と書いて「さんぼう」と読むこの言葉は、「^{ほとけ}仏」と、その教えである「法」、仏と法に導かれ、よき生き方を行ずる仲間「僧」の三つを指します。三つ目の僧は一人の僧侶ではなく、仏の教えに導かれて生活を共にする仲間を表します。

この「仏」「法」「僧」つまり「^{ぶつぼうそう}仏法僧」は、仏教者にとって大切なものですので、それらを宝と喩え三宝と呼ぶのです。

お釈迦様は、菩提樹の下でさとりを開かれました。目覚めた者ブツダ、つまり「仏」です。

それから、お釈迦様はサールナートという場所に赴き、かつて苦行を共にした五人の修行仲間、自らがさとした真理・真実を伝えます。その言葉が、「法」です。

そしてその「法」を聴き修行をし、さとりを開いた五人の修行仲間が「僧」となります。

これが、お釈迦様が初めて教えを説いた「^{しよてんぼうりん}初転法輪」といわれているものですが、同時に「仏法僧」の三宝が誕生した瞬間といえるでしょう。

これ以降、お釈迦様、「仏」を慕い、その教え、「法」を聴く集団、すなわち「僧」が形成され、大勢の仲間が集まってくるのです。

では三宝は仏教者にとって、どのような位置づけになるのでしょうか。実際にさとりを開いた存在である「仏」は、最上のお手本であるといっているでしょう。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

仏の説いた教え「法」は、よき生き方をするための基本となります。

仏の教えに導かれた仲間である「僧」は、互いに支えあい高めあう存在です。

この三つが互いに影響し合いながら、力を与えてくれるのだと思います。

仏教者は、はじめに三宝に帰依をする必要があります。帰依とは「拠り所にする」という意味ですから「仏法僧」の三宝を拠り所にして実践をしていくのです。

お釈迦様は「主体は自分自身である」と、はっきり示されています。三宝を生き方の道標として自分自身を主体とし実践する時「仏法僧」の三宝は、宝の如く輝き始めるのではないのでしょうか。

— 終 —